おたがいさま

f e m c i r c

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

【作品タイトル】
おたがいさま

【Nコード】
N0920BX

【作者名】
femcirc

【あらすじ】
婚約を承諾する条件に、交際相手の男性に対して包皮割礼するように告げた女性も……。

（前書き）

【警告】本文中には女性に対する猟奇的な虐待を克明に描写しているシーンが多々あります。人体切断（具体的には性器切除）や流血の類が苦手な方は閲覧を控えてるようにしてください。

スコットがエリカにプロポーズしたとき、彼女は本当に傲慢だった。
「あなたも知ってると思うけど、私、ペニスに弛んだ皮がまとわりついてるのって嫌なのよね」
エリカは底意地が悪そうな笑みを浮かべつつ明言する。
「だから、私と結婚したいって言うのなら、あなたには割礼手術を受けてもらうけど、いいかしら？」
ほんのわずかの間、スコットは熟考した――それは愛しい女性との性的な至福の人生を得る代償としては、大した犠牲でないように思えた。
「きみが僕の手術に立ち会ってくれるのなら、割礼手術を受けてもいいよ」
スコットは、そう返答した。
「もちろん、立ち会わせてもらうわ」
エリカは男性器と包皮に対して特別な『思い』があり、また、その包皮がどのように切り取られるべきかについても独自の『考え』を持っていたのだ。

そして、割礼手術の当日。
エリカは、スコットが自分のために性器の一部を切り取るという決心をしたことを嬉しく思う一方で、これから目の前で展開されることとなる情景に思いを馳せ、異様な興奮にとらわれていた――ペニスから包皮が切り取られるシーンを見たいと思い続けていた彼女にとっては、まさに千載一遇の好機だったのだ。
手術室内で、エリカはレイノルズ医師に対して、いろいろと注文をつけていた。彼女は、スコットが手術台にもたれている間、より広い部分にわたって、すべてが完全に切除されるべきだという自分の主張をはっきりとと述べていた。
「もっとよ、もっと引っぱって」
医師がスコットの切り取られることになる包皮を鉗子を使って引

っぽっているときも、エリカは何度も繰り返し、そう言い続けていた。そして、彼のペニスから彼女の希望どおりに包皮から切除され、傷口が縫合される。最後に包帯が巻かれ、手術が無事に終わると、彼女は手術室を立ち去るために自分のコートに手をかけた。

「エリカ、どこに行くつもりだい？」

義務を果たした婚約者が射るような眼差しで声をかける。

「次は、きみの番だよ」

その言葉遣いは穏やかだったが、その口調はエリカが傍若無人に振る舞っていたときよりも、ずっと強い意志をかもしだしていた。

「僕がちゃんと受けたんだから、きみだって受けないとね――おたがいさまだよ！　きみの分の料金もちゃんと支払ってあるからね。手術の準備はもうできているはずだから、きみも早くその仕切りの向う側に行って用意しなよ」

最初、スコットが何を言っているのかわからなかったエリカだったが、すぐにその言葉の意味を理解して茫然自失となった。自分が彼と一緒に割礼手術を受けるなどとは夢にも思っていなかったのだ。

「さあ、どうぞ」

呆けたままのエリカは、若い看護師によって導かれるまま、先ほどスコットが服を脱いだのと同じ仕切りの後ろに連れていかれてしまった。そして、そこに案内した看護師は、彼女が為すべきことを事務的に促してくる。

「さあ、洋服を脱いでパンティーを取ってください。そうそう、ブラジャーも外した方がいいですよ。万が一、血が付いたりしたら大変ですからね。怖がらなくてもいいですよ、少しも痛くありませんから。私たち看護師は、看護学校に入学するとき、ほとんどの者が、割礼を受けていますーーもちろん、私もですよ」

スコットがエリカのモーニングコーヒーに密かに混入させたヴァリウム錠剤は、彼女に対して絶大な影響を与えていたようだった。いつもならば、このような自分の性器を切除しようとする企みに対して、彼女は怒気を露わにして抗議していたはずだ。しかし、薬の

影響のせいか、その怒りの情動は和らげられ、真剣に反論する気力さえも失っていた。
そのため、エリカは看護師の指示に漫然と従ってしまい、気がついたときには、素っ裸にされ、あぶみが取り付けられた手術台に導かれていた。彼女は、そのまま手術台に座って後ろ側にもたれると、医師が割礼手術を滞りなく進めるために行う性器検診がしやすいよう、自ら太腿を大きく広げ、足首をあぶみにしっかりと結びつけられるに任せていた。
「スコット、あなたがフィアンセに対して割礼を望む気持ちがとてもよくわかりますよ。客観的に見ても、この女性器はあまり美しくありません……」
エリカの股間を覗きこんだ医師が感想を述べる。
たしかに陰裂から異様に大きくはみだしている肉襞は左右の形も不揃いで、しわくちゃな様相を呈しており、お世辞にも美しいとは言い難いものだった。また、かなり大きく発達している陰核を被う包皮もたるみきっていて、そのぐちゃぐちゃの肉塊のような見た目は、エリカ自身が男性器に対して求めている理想とも相反していた。
「ほんとに先生のおっしゃるとおりだわ。絶対、綺麗に整えた方がいいわ」
隣の看護師も揶揄するように付け加えた。
そんなふうに自分の外性器を酷評されることに対して、エリカは言い知れぬ屈辱感を味わったが、それにもかかわらず、彼らに文句を言い立てる怒りを保つことがまったくできないでいた。
「もうどうでもいいわ」
エリカは、すっかり投げやりになっていた。
医師が手術前の性器検診を終えた時点で、看護師はエリカの性器に麻酔をかけるための長い針が付いた注射器を手渡した。医師は陰核や陰唇の周辺部に浅い注射を終えると、最後に体内深くまで針を突き刺して骨盤底にも麻酔薬を注入した。
エリカは、その激痛を伴う処置から無意識のうちに身悶えていた。

スコットは、その時、彼女の手を取って励ますように強く握り締めた。
「痛いのは最初だけだよ」
割礼手術の手順としては、まず最初に小陰唇が切り取られることになっていた。医師は、その肉厚な付属物を看護師から手渡された鉗子で挟むと、グイッと力いっぱい引き伸ばした。
このとき、エリカは、スコットが何かを言おうとしていることに気づいた。
「レイノルズ先生、もっと、もっとめいっぱい引っぱってください」
それは、つい先ほど、スコットの割礼手術のときにエリカが口にした台詞とまったく同じものだったが、このような皮肉な状況に陥っても、彼女はなんの感慨も持つことができないでいた。
そして、医師が手にした外科用メスによる数回の往復で、左の小陰唇は用意されていた金属製トレイの中に落とされた。その後、右側の小陰唇も同じようにして、あっという間に切除されてしまった。
医師が傷口の縫合を手早く終えると、看護師がエリカを安心させるように、そして、半分揶揄するように告げる。
「ずいぶんとすっきりしましたわ。あともう少しで、誰に見せても恥ずかしくない見映えになりますわ」
その次に、エリカの陰核を露出させるために、医師は鉗子でたるんでいる包皮を引き上げると、外科用メスの切っ先を慎重に操って、そのすべてをきれいに剥ぎ取った。あとにはピクピクと震えるピンク色の大真珠だけが残された。
「さて、スコット。あなたは陰核亀頭だけの切除を望みますか、それとも、より深い部分から、すべてを摘出してほしいですか？」
エリカに聞こえるよう、医師が意味ありげに尋ねた。その意を汲んだスコットは即座に、執刀医が望む返答をする。
「もちろん、より深い部分からです、レイノルズ先生。すべてを完全に摘出してください。私は、未来の妻への割礼が完璧に施されることを希望します」

その言葉を聞いた医師は納得したように頷くと、左手に持った鉗子で常人よりも大きめの陰核亀頭をきつく挟むと、力一杯引っ張り上げた。そして、その引き伸ばされた肉芽の根本に外科用メスを突き刺してグリルと環状に切り進む。さらに左手の鉗子を手前に引きながら鼠蹊部の奥深くに向けて外科用メスを突き動かし、巧みに切り進んでいった。

スコットは医師の手が動くたびに少しずつ体外へと引っぱり出されてくる芋虫状の器官を興奮した面持ちで凝視し続けていた。そうして、ついに切開部から二つに分岐した陰核脚が露わになると、医師は右手の外科用メスを外科用ハサミに持ち替え、それぞれの肉根を可能な限り奥深いところで断ち切った。

医師は上気させた顔に勝ち誇ったような笑みをたたえながら左手の鉗子を持ち上げると、外科手術で摘出した性的な器官全体を二人の前にかざして見せた。彼は、当然ながら、自分の仕事に対して自信を持っていた――もはや女性の体内には敏感な性的組織の残滓は何一つ残されていないはずだった。

一方、エリカから摘出された“もの„の全容を目の当たりにしたスコットは驚きに満ちた表情を浮かべていた。

スコットは陰核という性的な中枢器官が女性の体内で、これほどまでに大きな“もの„として存在していることを露程も知らなかったのだ。そして、その真っ赤な芋虫のような器官の末端からぶら下がる二本の長大な肉根を目にして、婚約者から陰核器官のすべてを摘出させる決断を下して本当に良かったと思っていた。

これより先、エリカが感じることができる性的な快楽の源は膣内だけであり、もはや時間を浪費する前戯などは求めようとせず、すぐにでもスコットのペニスの挿入を熱望するようになるだろう――それこそが夫のために妻のあるべき真の姿だった。

「あなた方が望むのなら、今日、切り取ったものを記念品として、アルコール標本にしてお渡しすることも可能ですが、どうなさいますか？」

医師が物思いに耽るスコットに声をかける。「あなた方」と呼びかけてはいるが、実質的に彼一人に尋ねていることは一目瞭然だった。

スコットは、エリカからヴァリウム錠剤の効き目が徐々に薄れてきたとき、彼女が怒り狂って自分を罵倒すると予想していたが、割礼手術はその過激な人格をも落ち着かせたようだった――未来の妻は静かに自分の運命を受け入れたようだった。

それを目の片隅で確認したスコットは確固たる意志を持って答える。

「私のは必要ありませんが、エリカの“もの”は標本にして渡してください！」

二人の割礼は完璧だった。その手術以来、彼らの関係は、常に濃厚なセックスによって深く結びつけられるようになっていた。また、傲慢不遜だったエリカは、まるで人が変わったかのように、スコットに対して慎ましやかで控え目な態度を取るようになっていた。

（後書き）

　この小説は海外の　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ（女子割礼妄想）小説を翻訳したもので、原作は　ｌａｉｒ－ｏｆ－ｈｏｒｒｏｒｓ．ｃｏｍ　というアダルトＳＮＳの　ｆｅｍｃｉｒｃ　ｆａｎｔａｓｙ　グループ„Ｎｅｗ　Ｅｍｂａｂａ”に投稿された　Ｍｉｋｅ　Ｓｃｏｔｔ　氏による、„ＳＡＵＣＥ　ＦＯＲ　ＴＨＥ　ＧＯＯＳＥ”です。Ｍｉｋｅ　Ｓｃｏｔｔ　氏が数多く投稿しているショートストリーのうちの１つです。とても短い話なのですが、肝心の割礼シーンは、それなりに描写されてます。やや急ぎ足の嫌いはありますが、ショートストーリーでは、こんなものではないでしょうか。

　あと、タイトルの『おたがいさま』ですが、原題を単純に訳すと『ガチョウのためのソース』となります。意味不明なので、アルクで調べてみたところ、英語の諺の冒頭部分で„Ｓａｕｃｅ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｇｏｏｓｅ　ｉｓ　ｓａｕｃｅ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｇａｎｄｅｒ．”＝「雌ガチョウにとってのソースは雄ガチョウにとってもソース。／一方に当てはまることは他方にも当てはまる」という意味でした。そこで、本文の内容を加味して『おたがいさま』としました。